数えられる「時」

『獅子の騎士』と『荷車の騎士』における時間性

武藤 奈月

序

二十世紀後半のポール・ズムトールによる提唱以来、「流動性」（mouvance）という概念は、中世テクストが提示する特徴の一つとしてしばしば指摘される[1]。聴衆の前で上演あるいは朗読されるという、中世作品の口承文芸としての性質上、その受容の過程においてテクストが揺れ動くことは不可避であった。劇作者や役者、さらには聴衆といった複数の人物による介入があった劇作品や、旋律を伴い歌われた抒情詩は当然のことながら、朗読される物語（roman）でも、即興のパフォーマンスがあったことが推測できる。これらの口承性かつ流動性を持ったテクストは、書かれた文字へと変化する段階でも揺れ動く。数十年、長ければ数世紀が経過してから書き写された写本によって今日まで伝わっている作品も少なくはない。作品は創作され朗読される段階で変化し、筆写され流布する過程でも、そのテクストには異文が生じる。そのため、中世のテクストは絶えず、二重に変化する可能性を孕んでおり、これを一人の「作者」による同一の「作品」と見なすことには、常に留保を付けるべきだろう。

ところが、物語中のとある側面にのみ着目する場合、異文が少数しか存在していないことが分かる。以下、本稿で扱うクレチアン・ド・トロワの『獅子の騎士（イヴァン）[2]』（1177-1181 年頃）とクレチアンおよびその後をゴ

---

[1] Paul Zumthor, *Essai de poétique médiévale*, Seuil, 1972, p. 65-74.

[2] 以下、テクストの引用は *Le Chevalier au lion (Yvain)*, éd. Mario Roques, Champion, 1960 (réimpression 1968) により、*Yvain* と略記し、詩行数とページ数を記す。異文に関しては、クレチアンの原本テクストの再構成を目指し、全写本の異文を註にほぼ含んだ、ヴェンデリーン・フェルスターによる Christian von Troyes, *Sämtliche Werke*, hgg. von W. Foerster, *Der Löwenritter (Yvain)*, Halle, Max Niemeyer, 1887 および『獅子の騎士』を伝えている全写本の転写を参照することのできる Meyer : http://francaisancien.net/activites/textes/kmeyer/kpres.html (2018 年 10 月 14 日参照) を参考にした。なお、原文は全て平韻八音綴の韻文ではあるが、以降の訳出に際しては詩行形式を必ずしも保持していない。

ドフロワ・ド・ラニーが書き継いだ『荷車の騎士（ランスロ）[3]』（1177-1181年頃）では、「数年後」や「その夜」といった作中の時間を示す表現を伴って出来事が語られる。いくつかの例を除けば、これらの語句には異文がわずかに存在するだけである[4]。一般的に、数字が原本に書かれている場合、そのテクストを伝える諸々の写本では、自ずと写本の数に応じた数のヴァリエーションが生じることが多い。それにもかかわらず、『獅子の騎士』と『荷車の騎士』の時間性、つまり作品としての時間的な構造を示す表現に関しては、数カ所を除けば、比較的固定した読みを示している。数字を含む「一年後」や、特定の祝祭日を示す「聖霊降臨祭の日に」といった設定は、物語における不変の要素と見なされていたのだろう。クレチアンによる作品の創作から早ければ半世紀、遅ければ一、二世紀後に作品を書き写した写字生は、時間標識、すなわち時間的構造の指標となるような、出来事の継起の時期や順番、長さについての重要性を把握していたと推測できる。言い換えれば、二作品における時間性は、物語における根幹であり、後世でもそのように見なされて受容されてきたと捉えられる。

エマニュエル・ボームガルトネルが既に提案したように、クレチアンの『獅子の騎士』と『荷車の騎士』は、内容上の相互の結びつきから、二部作として捉えられる[5]。『獅子の騎士』の本文中には『荷車の騎士』への三つの言及があり、クレチアンが同時に二つの作品を創作した、 —— あるいは少なくとも虚構上でそのように演出した —— と推定される。したがって、作中の時間性をある程度固定したものと見なせば、『荷車の騎士』という、一方の物語内の時間は、同一作者による別の作品、『獅子の騎士』内の時間に組み込まれていると考えることができる。以下、まずはボームガルトネルの著作

---

[3] 引用は Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette (Lancelot)*, éd. Mario Roques, Champion, 1958 (réimpression 1969) により、*Lancelot* と表記する。異文に関しては、同じくフェルスターによる Christian von Troyes, *Sämtliche Werke*, hgg. von W. Foerster, *Der Karrenritter (Lancelot)*, Halle, Max Niemeyer, 1899 および『荷車の騎士』を含む全写本の画像を電子化したインターネット上のサイト *The Princeton Charrette Project* : http://www.princeton.edu/~lancelot/ss/ (2018 年 10 月 14 日参照) を参考にした。

[4] 両作品における時間性に関する先行研究は多く存在するが、異文の少なさを改めて強調しているのは、『獅子の騎士』に関する時間性を論じた Philippe Walter, *Canicule : essai de mythologie sur* Yvain *de Chrétien*, SEDES, 1988, p. 34-41 である。『荷車の騎士』の時間性については Id., *La Mémoire du temps : Fêtes et calendriers de Chrétien de Troyes à* La Mort Artu, Champion, 1989, p. 102-105 を参照。ヴァルテルの研究はいずれも、時間性の検討に基づく神話学的アプローチを取るが、本稿はあくまで、ボームガルトネルが行った分析のように、物語の次元での時間性の検討にとどまる。

[5] Emmanuèle Baumgartner, *Chrétien de Troyes. Yvain, Lanelot, La charrette et le lion*, Presses universitaires de France, 1992.

で部分的にしか扱われてこなかった、登場人物（イヴァンと泉の貴婦人、およびランスロ）と時間との関係に焦点を当てつつ、両作品の全編における時間性の相違を示す。続いて、『獅子の騎士』における『荷車の騎士』への三度の言及を基にして、二作品の並行関係を明らかにする。最後に、『荷車の騎士』から『獅子の騎士』への暗示が見られることを示す。特に、「未来の墓」という、時間性を考察する上でこれまでの先行研究では触れられることのなかったエピソードに着目し、この作品が未来への志向という独自性を持っていることを明らかにする。

1. 登場人物と「時間」

フィリップ・メナールはかつて、クレチアンの作品における時間性の主な特徴の一つとして、時間への無関心さ、すなわち一種の無時間性を指摘していた[6]。例として挙げられているのは、『獅子の騎士』において狂気に陥ったイヴァンが発見されるのが単に「ある日」（« un jor », v. 2884, p. 88）にすぎないこと、また『荷車の騎士』では、「イゾレの時以来」（« onques des tens Ysoré », v. 1352, p. 42）という、シャンソン・ド・ジェストに登場する古い王の名前を用いた伝説的な過去という時間が用いられることである。また、十三世紀に書かれた『散文ランスロ』が湖のランスロの人生を幼年時代から仔細に語ることになるのとは反対に、クレチアンの作品では、イヴァンやランスロの幼少時代や老年時代は決して語られることがない。作中の登場人物は、冒頭から結末部分まで、おそらくは青年から壮年のままの姿で冒険に出ている。作中で流れている時間の一部は、社会での数値化された時間を超えており、神話の次元に属しているとも言える。

しかしその一方で、クレチアン自身の他の作品や同時代の他の物語と比較した際、『獅子の騎士』と『荷車の騎士』の二作品における計算された時間性への配慮は際立っている。時間は、物語の進行に重要な役割を果たし、作中の登場人物の行為と密接な関係を結んでいる。登場人物は、ある時には迫り来る時間に追われ、またある時には、すぐに訪れることのない時間を待ち侘びる。

『獅子の騎士』は聖霊降臨祭、『荷車の騎士』では昇天祭という、キリスト教の祝祭日で幕を開ける。これらの祝祭日は、おおむね五月に当たり、ど

[6] Philippe Ménard, « Le temps et la durée dans les romans de Chrétien de Troyes », in *Revue historique*, t. LXXIII, 1967, p. 378.

ちらも人間が活動を開始する季節である春から初夏に相当する。聖霊降臨祭は復活祭後の第七日曜日であり、五月六日から六月十日の間の日曜日である。昇天祭は復活祭後の四十日目であり、四月二十八日から六月一日に当たる。祝祭日は、アーサー王宮廷に円卓の騎士たちが会同する日であり、物語が始まる出発点を象徴的に示している。『獅子の騎士』では、聖霊降臨祭の日に、宮廷に集まっていた騎士と王妃が、主人公イヴァンの従兄弟カログルナンの冒険の話を聞く。カログルナンが「七年以上前[7]」（« plus de set anz », v. 173, p. 6）に経験した、ブロセリアンドの森の不思議な泉での失敗した冒険の話に駆り立てられ、イヴァンもその場所へと赴く決意をする。

ブロセリアンドの森で、泉の守護者エスクラドスを破ったイヴァンは、未亡人ローディーヌを妻として得る。アーサー王や円卓の騎士はイヴァンの結婚式のために泉を訪れ、「丸々一週間」（« trestote la semainne antiere », v. 2469, p. 76）、祝宴が続く。ゴーヴァンはイヴァンに、結婚生活に安住することなく、冒険に出立するように助言する。奥方は一年間、泉を離れる許可をイヴァンに与え、一年後の「聖ヨハネ祭（六月二十四日）の一週間後」（« huit jorz aprés la Saint Johan », v. 2590, p. 79）までに戻るように釘を刺す。ところが、イヴァンは当初、期限まで長い時間があるため、この約束を安易に考えていると思われる。出発前、イヴァンはむしろ、一年は長すぎると考え、直ちに戻って来る意志を奥方に表明する。また、以下のように述べ、不可抗力の出来事が生じた場合の時間を、一年という期限の中から差し引くように彼女に依頼する。

> 人は、何が起こるか分からないのに、すぐに戻って来られると考えます。そして私にも、何が自分の身に起こるのかは分かりません[8]。

ここでのイヴァンは一年という時間の実感が持てず、三人称を使用して他人事のように話している。そして「未来」を見通すことをせず、先を読もうとしないイヴァンに対して、語り手は冷ややかな目を向けている。イヴァンの罪とは、奥方ローディーヌとの間で交わした期限の忘却にあった。イヴァンはここで、時間性に対して背信行為を働いていると言えるだろう。

---

[7] この箇所は主要な写本によって、「六年ほど前」（P 写本、Paris, BnF. fr. 1433）や「十年ほど前」（G 写本、Paris, BnF. fr. 12560）、「五年前」（A 写本、Chantilly, Musée Condé 472）と読みが異なる。いずれも、ある程度の長い期間を象徴的に表す。

[8] « Mes tex cuide tost revenir / qui ne set qu'est a avenir. / Et je ne sai que m'avenra » (*Yvain*, v. 2589-2591, p. 79.)

> 彼は「希望」が自身を裏切る時を全く知らないと私には思われるのです、というのも、もし一日でも彼らが一緒に決めた期限を過ぎてしまえば、それからは、奥方のもとで休戦も平和も手にするには大変苦労するでしょうから[9]。

語り手がこのように予言していた通り、イヴァンは約束を忘れ期限を超過する。その間、奥方は夫の帰還を待ち侘び、自身の部屋で刻々と経っていく時間を数えていた。

> 奥方は自身の部屋に、一日も欠かすことなく、時のしるしを刻んだ。というのも愛する人というのは、もの思いに沈み、決してよく眠ることもできず、過ぎ去っていく日々とこれから訪れる日々を、一晩中、眠れないままに数え上げるのである[10]。

引用詩行の三行目の主語は奥方ではなく、« qui »に変わっており、語り手による一般論へと移行しているが、イヴァンの帰還を待ち、日々を数えるのは明らかに奥方である。奥方は時間に対して執念を抱き、よく眠ることもできずに、日々を数えている。不眠は恋という病の代表的な症状である。真に恋する者は十分な睡眠も取ることができないはずであり、常に恋人のことを想っていなければならない。泉の貴婦人に一目惚れをしたのはイヴァンであり、これまでの場面では彼女の側からの恋情が描かれることはほとんどなかった。わずか数行で描写された、ローディーヌの態度は、イヴァンの不在の間にも彼を想うという、恋愛における誠実さを表している。また同時に、ローディーヌが数えている時間の重みが読み取れよう。イヴァンが時間を忘れて馬上槍試合に熱中している間、奥方は時を数え、時を支配している。ブロセリアンドの森の不思議な泉の貴婦人は、一種の神々しさや秩序を体現している。イヴァンが彼女と結んだのは、軽い約束ではなく絶対的な契約であり、破ってはならぬものだった。イヴァンがそのことを理解するのは、約束の期限を過ぎてしまい、奥方と離別した後のことである。

奥方から言い渡された離別が原因となり、イヴァンは「八月中旬」（« a la mi aost », v. 2681, p. 82）に理性を失う。ここで最初の一年間が経過しており、

---

[9] « Ja, ce cuit, l'ore ne savra / qu'esperance traï l'avra ; / car s'il un tot seul jor trespasse / del terme qu'il ont mis a masse, / molt a enviz trovera mes / en sa dame trives ne pas. » (*Ibid.*, v. 2663-2668, p. 81-82.)

[10] « Ma dame en sa chanbre poinz a / trestoz les jorz et toz les tans, / car qui ainme, il est en espans, / mes tote nuit conte et asome, / n'onques ne puet panre boen some, / les jorz qui vienent et qui vont. » (*Ibid.*, v. 2756-2761, p. 84.)

翌年に場面が切り替わっている。狂気に陥ったイヴァンは文明を象徴する場所である城館を離れ、畑や果樹園を通り抜けて行く。そして当時、服を着用するのが当然の礼節であったにもかかわらず、自分の服を引き裂き、野蛮な振る舞いをする。

> イヴァンはかなり進んで行ったので、天幕や幕舎から非常に離れたところへとやって来た。すると、激しいめまいで頭が揺れた。それはとてもひどく、彼は正気を失った。そして、自分の服を引き裂き、破り、畑や耕作地を通って逃げ出した。残された従者たちは動揺し、どこへ行ってしまったのかと訝しく思った。彼らは、右や左、騎士の館や生け垣、果樹園を探し回ったが、どこにもイヴァンはいなかった。イヴァンはまたたく間に立ち去っており、とある牧場の近くに来た。そこには弓を持った若者がいて、五本の矢には大きくて鋭い逆刺（かえり）が付いていた。イヴァンは若者へと向かって行き、彼が持っていた弓と矢を奪おうとしたが、そのときに何をしたのか、思い出すことはなかった[11]。

イヴァンの行為は、宮廷風礼節（courtoisie）からは程遠く、クレチアンは語り手の目を通して、そのことを婉曲的に語っている。ここでイヴァンは若者に襲いかかって傷つけており、おそらくは殺してしまったのだが、そのことを思い出すこともしない。奥方との約束の期限を忘れてしまったイヴァンはさらに、それまで流れていた現実的な時間から離れて行く。イヴァンは無法者や追放者、自ら社会生活を放棄した隠者などが暮らす森へと向かう。そこで野人のような生活を送った後、ノロワゾンの貴婦人がモルガンから受け取った軟膏により、正気を取り戻す。

物語内の時間軸は、『獅子の騎士』と『荷車の騎士』では全く異なっており、クレチアンが執筆当初から両作品で違う時間の尺度を採用したことが分かる。『獅子の騎士』では、物語が三年以上という長期間に亘って展開され、言及される内容は数年間にも及ぶ。一方、『荷車の騎士』では、昇天祭の日に、悪を体現するメレアガンによる王妃の誘拐から始まり、最終的にはメレアガンの死へと直線的に進行する。円卓の騎士の一人であるゴーヴァンは王

---

[11] « Et il va tant que il fu loing / des tantes et des paveillons. / Lors se li monte uns torbeillons / el chief, si grant que il forsane ; / si se dessire et se depane / et fuit par chans et par arees, / et lessa ses genz esgarees / qui se mervoillent ou puet estre : / querant le vont destre et senestre / par les ostex as chevaliers, / et par haies et par vergiers ; / sel quierent la ou il n'est pas. / Et il s'an vet plus que le pas / tant qu'il trova delez un parc / un garçon qui tenoit un arc / et cinq saietes barbelees / qui molt erent tranchanz et lees. / Yvains s'en va jusqu'au garçon / cui il voloit tolir l'arçon / et les saietes qu'il tenoit ; / por qant mes ne li sovenoit / de rien que onques eüst feite. » (*Ibid.*, v. 2804-2825, p. 86.)

妃を追う途中、同様に救出に向かう騎士（ランスロ）に出会う。この騎士は王妃の行方を知るために、恥を忍んで荷車に乗り、以後、「荷車の騎士」と呼ばれる。荷車は、罪人を乗せて町中を引きずり回すための晒し台であり、この呼び名は非常に不名誉であった。彼が直面する、高慢な騎士との戦いや「剣の橋」といった、冒険のエピソードはいずれも、異なる場所、異なる時間に起こっており、一日が明確に分割されている。これ以降、王妃を救出する時点まで、語り手は登場人物の行為を語る際、「夜が明けるとすぐに」（« Tot maintenant que l'aube crieve », v. 1281, p. 40）、あるいは聖務日課の時間帯を示す「九時課まで」（« jusqu'a none », v. 1836, p. 56）といった状況補語を必ず付ける。そして道中、ランスロが一つあるいは複数の冒険を終えると夜になり宿で休むという、いわば日記のようなパターンによって物語の筋が進行して行く。王妃の誘拐という非常事態からその解放へと向かって、ランスロは一日毎に冒険を乗り越え、少しずつ王妃のいるゴール国へと近づく。そのため、『獅子の騎士』のように、時間の経過や季節を明示する表現が認められなくとも、ランスロがメレアガンとの決闘を行い、王妃を解放する七日目までに関しては、時間の流れを一日毎に辿ることが可能となる。

『荷車の騎士』は、王妃の誘拐からその解放まではきわめて直線的な時間に沿って進むが、王妃の解放以降の後半では、時間の流れが一変する。自身の解放後、王妃はランスロの死という誤った噂を信じて嘆き続け、「二日間」（« deus jorz », v. 4246, p. 129）が経つ。アーサー王はといえば、小人の罠に騙されて行方不明となったランスロの探索を命じ、丸々「一週間」（« tote la semainne », v. 5301, p. 161）休むことなく、宮廷へと戻る道を進む。このような時間性にかかわる表現は、王妃が囚われていた期間の、直線的で明確に分割された時間標識とは異なる性質を提示していることが分かる。ランスロはメレアガンの計略により、彼が「五十七日間以内」（« An moins de cinquante et set jorz », v. 6127, p. 186）で建てさせた塔へと幽閉される。この数十日間という時間標識は、これまでの『荷車の騎士』では実際に流れることのなかった、長い時間の単位である。『荷車の騎士』の前半で語られている物語は、わずか数日間の出来事であった。『荷車の騎士』はこれ以後、長期的かつ円環的な時間構成を持った『獅子の騎士』へと合流しているとも言えるだろう。ランスロとメレアガンの間では、「一年以内」（« au chief de l'an », v. 3882, p. 118）に再び決闘することが取り決められていた。ランスロとメレアガンの間では一年という長い期間は、クレチアンの設定した時間であり、6146 行目以降を引き継いだとされるゴドフロワもこれを踏襲している。メレアガンは密かに

ランスロを幽閉しつつ、約束の履行を要求するため、改めてアーサー王宮廷に赴く。物語の後半では、ランスロが乙女によって発見され、正式に決闘に臨むまでの間、『獅子の騎士』と同様、一年単位で季節がめぐっていく。また、イヴァンの不在を奥方が待っていたように、読者はメレアガンに閉じ込められたランスロの再登場を待つことになる。

2. 『獅子の騎士』と『荷車の騎士』の並行性

『獅子の騎士』中には、計三回の『荷車の騎士』への言及があり、最初の二回の言及と最後の言及との内容の相違からは、両作中の時間の経過が読み取れよう。『荷車の騎士』への言及はすべて、イヴァンの狂気からの回復後という、『獅子の騎士』の物語の後半にある。最初の二つの言及は、『獅子の騎士』後半での最初の冒険の途中および二番目の冒険の途中に埋め込まれている。

最初の言及は、イヴァンがライオンの救出以降に遭遇する、最初の冒険のエピソードの内部にある。正気を取り戻したイヴァンは、蛇に襲われているライオンを助け、以後、この高貴な動物は従順に付き従い、イヴァンの窮地を救う。ライオンを救出してから、イヴァンは泉に戻り、妻ローディーヌの侍女リュネットと再会する。彼女は無実の罪で起訴され、「翌日」（« demain », v. 3589, p. 109）、火刑に処せられる直前であり、刑の執行まで「三十日間の猶予[12]」（« par respit de trente jorz », v. 3685, p. 112）が与えられていた。イヴァンが、騎士道の模範として知られるゴーヴァンへの救助の依頼を提案すると、リュネットは「今、ゴーヴァン殿は王妃を追って大変な苦労をされていますから、彼女を見つけるまでは一日たりとも休息するつもりはないでしょう[13]」と答える。この場面でのゴーヴァンの不在は、別の作品『荷車の騎士』のエピソードである、王妃救出のための冒険によって正当化されている。

イヴァンが次の冒険で出会う館の城主は、リュネットと同様に、ゴーヴァンの不在を話題にする。リュネットに救援を約束し別れ、イヴァンは道中で見つけた館に宿泊する。館の主人はゴーヴァンと姻戚関係にあり、その頃、巨人アルパン・ド・ラ・モンターニュの攻撃に悩まされていた。アルパン・

---

[12] ただし写本によって異同が見られ、F 写本（Paris, BnF. fr. 1450）は「六十日間」、その他の六写本はすべて「四十日間」である。「四十日間」がクレチアンのテクストであり、「三十日間」は底本の写字生ギヨの創案か。

[13] « s'an est or entrez an grant painne / mes sire Gauvains qui la quiert. / Ja mes nul jor a sejor n'iert / jusque tant qu'il l'avra trovee » (*Yvain*, v. 3706-3709, p. 113.)

ド・ラ・モンターニュは、イヴァンが館に立ち寄った日の「翌日」（« demain », v. 3861, p. 118）、ゴーヴァンの親族たちを貪り食う予定であった。ゴーヴァンの姉妹の夫である城主はイヴァンに対し、「そうしてゴーヴァン殿はその者の後を追ったのです、王妃様を連れ去ったのだから、どうか神がこの者を手ひどく苦しめますように[14]」と言う。『荷車の騎士』の前半への言及は、二人の登場人物の台詞により、ここで二重化されている。イヴァンは巨人を倒した直後、リュネットのところへと戻り、同日に間一髪で彼女を救出する。このように、『獅子の騎士』の後半にある、イヴァンによる一連の弱者の救出劇は、入れ子構造になっており、緊張感を劇的に高める効果を持っている。渡邉浩司がイヴァンの冒険をいみじくも「時間そのものと戦う運命にある[15]」と評するように、イヴァンが物語の後半で遭遇する出来事は、常に期限が迫っており、緊迫感を伴っている。作品全体が円環的な時間構成を呈する中で、物語の後半では、前半で「時間」を忘れてしまったイヴァンが、差し迫る期限と戦う。

主人公イヴァンが『獅子の騎士』の後半において遭遇する冒険の性質は、前半の性質とは異なっている。冒頭、イヴァンは従兄弟カログルナンから失敗した冒険の話を聞き、単なる好奇心と従兄弟のための復讐を動機として出発した。泉の貴婦人ローディーヌの獲得以後は、ゴーヴァンに煽られ、自身の騎士としての価値を向上させるために馬上槍試合に参加する。ブロセリアンドの森にある泉への出立も、広大な土地を所有する美しい貴婦人との結婚も、馬上槍試合への参加も、どれも利己的な目的の冒険であった。真の意味でのイヴァンの冒険は、奥方の愛の喪失後、ライオンを救助し、自身の名を一度捨て、「獅子の騎士」という異名を自ら背負う時点から始まる。そして、危機に瀕した他者と出会い、その救援のために剣を振るう。この仮の名は、奥方の愛を失い、狂気に陥り、野人としての生活を経て、無から再出発するため、そして再びアーサー王宮廷の世界へと同化するための呼び名である。

二作品の並行関係は、ゴーヴァンの移動に着目する場合も顕著な形で現れる。名前が言及されるだけのイヴァンやランスロとは異なり、ゴーヴァンは実際に二作品間を行き来している。だがそれゆえに、ボームガルトネルが指摘するように、ゴーヴァンは自身が必要とされる場での不在が強調される人

---

[14] « einz est alez aprés celui / cui Damedex doint grant enui, / quant menee en a la reïne » (*Ibid.*, v. 3931-3933, p. 120.)

[15] 渡邉浩司「イヴァンの狂気と『神話の時間』」、『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）、第 32 号、2000 年、5 頁。

物でもある[16]。模範的な騎士であるゴーヴァンの名前はしばしば登場するが、ゴーヴァン自身が何らかの行為を行う場面は少なく、間接的に他の登場人物に言及されるにとどまる。先に引用した、二つの場面では、それぞれリュネットとゴーヴァン自身の親族が窮地に陥っていた。ところがゴーヴァンは、別の作品である、『荷車の騎士』での冒険に身を投じているため不在である。また、「一日たりとも休息するつもりはなく」王妃を探すゴーヴァンが言及されるが、彼女を発見し、解放するのは皮肉にもランスロである。『荷車の騎士』の内容からは、このクレチアンの皮肉が幾重にも重なって読み取れる。『獅子の騎士』の登場人物の台詞は、ゴーヴァンが懸命に王妃救出に向かっていることを想起させるものの、実際の『荷車の騎士』のテクストによれば、その間の冒険に失敗し、「水中の橋」で溺れる寸前であった。『荷車の騎士』の冒頭では、ゴーヴァンと荷車に乗った騎士は、共にゴール国へと連れ去られた王妃の救出に向かっていた。道中、「剣の橋」と「水中の橋」という分岐点に着いた二人は、それぞれが一つの道を進むことを取り決める。これらの詩行までは、ゴーヴァンは宮廷の模範的な騎士として描写されている。ところが、この分かれ道を進んで以来、『荷車の騎士』本文には登場しない。語り手は、「剣の橋」を超えゴール国へと向かう、ランスロの冒険の語りに専念し、ゴーヴァンの冒険の語りへは戻らない。ランスロにより王妃と他の囚人たちが解放される中盤以後は、「荷車の騎士」という、序文で作者自身が与えた表題と同じ異名を持ったランスロに主人公の座が完全に譲渡される。再びゴーヴァンに関する語りへと戻るのは、ゴール国に囚われていた人々を救出したランスロが、行方不明となったゴーヴァンの探索に出発する場面である。ここでランスロは道中、メレアガンの策略ゆえに、小人に騙され、場面から一旦姿を消す。宮廷の人々はゴーヴァンを探し、水中で溺死する寸前であるのを発見する。

> 人々は水中の橋へと向かい、そこへ来るとすぐにゴーヴァン卿を見つけたが、彼は橋からひっくり返り、深い水の中に落ちていた[17]。

ゴーヴァンが姿を現すことができるのは、ランスロという主人公が不在の場面である。ゴーヴァンは、ランスロが不在のわずかな数行の間、水中から救

---

[16] Emmanuèle Baumgartner, *op. cit*., p. 71.

[17] « Vers le Pont soz Eve s'an vont, / et tantost qu'il vienent au pont / ont mon seignor Gauvain veü, / del pont trabuchié et cheü / an l'eve, qui estoit parfonde. » (*Lancelot*, v. 5105-5109, p. 155-156.)

出され、文字通り物語の前景へと引っ張り上げられて再登場する。ここでは、ゴーヴァンがランスロ（当時は「荷車の騎士」）と別れて最後に登場してから、既に四千行が経過している。その間のゴーヴァンの冒険は語られず、溺れていたことが明らかになる。さらにその後、ゴーヴァンは、行方不明となったランスロの代わりにメレアガンと戦うことが予見されるものの、乙女がランスロを発見したため、決闘する役割を失う[18]。

ゴーヴァンに関する最初の二つの言及と、第三番目つまり最後の言及では、『獅子の騎士』において言及される『荷車の騎士』の内容が異なっている。最後の言及は、『獅子の騎士』の計 6808 行中のおよそ三分の二に相当する詩行に見られる。

> 王妃が、メレアガンに閉じ込められていた牢獄から、他の全ての囚人とともに戻って以来、三日間が経っており、そしてランスロはといえば、裏切られて塔の中へと連れ去られていた[19]。

この『荷車の騎士』への言及は、作品の後半、正確にはちょうどクレチアンが執筆した部分までの内容を指し示す。ゴーヴァンの不在と王妃の誘拐を示す最初の二つの言及と、最後の言及との相違の一つは、ランスロの名前の有無である。途中から「獅子の騎士」と自ら名乗るイヴァンとは逆に、『荷車の騎士』では、先に「荷車の騎士」という不名誉な呼び名を持つランスロが活躍し、冒険を経た後に、ランスロという真の名前を得る。最初の言及を埋め込んだ段階での『獅子の騎士』の該当部分では、まだ「ランスロ」は登場していなかった。王妃救出のために向かう、ひとりの騎士が登場するだけである。これはクレチアンによる、聴衆への「ランスロ」という名前の早まっ

---

[18] この部分はゴドフロワ・ド・ラニー執筆部分とされる。『荷車の騎士』のエピローグ部分の記述によれば、ゴドフロワ・ド・ラニーがクレチアンの同意を得て、ランスロの塔への幽閉からメレアガンの死で終わる大団円までを執筆したとされる。（*Ibid.*, v. 7102-7112, p. 216.）

[19] « s'avoit tierz jor que la reïne / ert de la prison revenue / ou Meleaganz l'a tenue / et trestuit li autre prison, / et Lanceloz par traïson / estoit remés dedanz la tor. » (*Yvain*, v. 4734-4739, p. 144.) この六行全体が指している、囚人の解放と二度のランスロの幽閉はそれぞれ別の場面で起こるため、二作品の執筆年代や順序を特定する論拠となる、この詩行の解釈を巡って議論が続いた（経緯は Jan Janssens, « The « simultaneous » composition of *Yvain* and *Lancelot* : fiction or reality ? », in *Forum for modern language studies*, t. XXIII, 1987, p. 366-376 を参照）。ここでは、4737 行目までと 4738 行以降が、『荷車の騎士』の後半におけるそれぞれの重要な出来事を指していると解釈する。（D. F. ハルトによる現代フランス語訳と註釈も参照 : Chrétien de Troyes, *Le Chevalier au lion ou le roman d'Yvain*, éd. David F. Hult, Librairie Générale Française, 1994, p. 343.）

た種明かしを避けるため、また二作品の物語内の時間の流れを一致させるための配慮と思われる。

『荷車の騎士』の冒頭では、主人公と思しき騎士は、「自分の名前も覚えておらず」（« Ne ne li manbre de son non », v. 717, p. 23）、王妃のことしか頭になく、専ら物思いに沈みながら騎行していた。ゴール国に着くと、アーサー王宮廷から連れ去られた全ての囚人の解放を賭けて、メレアガンと決闘する。既に剣の橋を渡って来たために負傷しており、メレアガンが優勢になる。王妃もその決闘を見物していることに気付いた、とある乙女は、荷車の騎士が他ならぬ王妃のために決闘に臨んでいるのではないかと推測する。そしてランスロが再び本来の資質を発揮できるよう、王妃に名前を尋ねる。すると王妃はランスロという名前を明かす。

> 王妃は「乙女よ、あなたが頼んだことには全く意地の悪さも敵意も感じられませんし、むしろ逆です。あの騎士は、私の知る限りでは、『湖のランスロ』と言います。」と答える[20]。

これを聞いた乙女は狂喜乱舞し、決闘場の観客席の前方へと駆け寄り、荷車の騎士へと王妃が見ていることを大声で告げる。このランスロという名前が明かされるのは、作中で悪を体現するメレアガンとの決闘の場面である。そして、ランスロが意中の奥方として忠誠を誓う人物の口からその名前が発せられる。この名前の解明は、冒頭の場面からのサスペンスが解消する場面であり、王妃への崇拝という作品自体の主題を如実に示している。王妃が自分を見つめていることを知るや否や、ランスロはメレアガンに反撃する。乙女の言葉を聞き、ランスロはランスロという真の名前に値する振る舞いを思い出すのである。クレチアンは、『獅子の騎士』での言及でも、最初からランスロという名前を用いることなく、『荷車の騎士』におけるこの名前の登場を追い越さないように注意したのだろう。

ところで、『獅子の騎士』の中盤においてイヴァンは、アーサー王宮廷世界から完全に排除された状態にあった。ここではもはやキリスト教の祝祭日が言及されることはなく、宮廷からも、ブロセリアンドの泉からも疎外されている。

---

[20] « — Tel chose requisé m'avez, / dameisele, fet la reïne, / ou ge n'antant nule haïne, / ne felenie, se bien non : / Lanceloz del Lac a a non » (*Lancelot*, v. 3656-3660, p. 110.)

> イヴァンは森で獣を待ち伏せし殺すと、獣肉を生のままで食べる。そして森であまりにも長い間、狂人として野人として生活したので、ついには、ある隠者のとても低くて小さい家を見つけ、荒れ地を耕していた隠者を見つけた[21]。

イヴァンが森で過ごした時間は、社会的生活の枠外にあるため、もはやこれまでのように数値化された時間で数えられることがない。狂気ゆえに森を彷徨していた期間は、「長い間」（tant）としか示されることがなく、この間の彼の生活の様子はわずか数行で要約的に描写されている。

しかしながら、『荷車の騎士』の時間軸と、この作品への『獅子の騎士』における三つの言及を手がかりとして、狂気の期間を仮に計算することも可能であろう。『獅子の騎士』で明示されているのは、作品の冒頭の五月頃から六月にかけて、イヴァンの冒険とローディーヌとの結婚が行われたということである。そしてその一年と一カ月後、八月の半ばにイヴァンが狂気に陥り、「長い間」森で過ごす。ノロワゾンの貴婦人が軟膏でイヴァンの狂気を治癒する場面にも「暑い太陽の下で」（« au chaut soloil », v. 2998, p. 92）という記述が見られ、夏に設定されている。『獅子の騎士』の後半でのイヴァンの回復後、リュネットと再会する場面以降において、『荷車の騎士』への言及が埋め込まれている。一方で、『荷車の騎士』では、冒頭の王妃の誘拐が昇天祭、そしてその解放はより後期の祝祭である聖霊降臨祭の頃、正確には聖霊降臨祭の四日前に設定されている。そのため、物語は初夏から盛夏に向かって進行していると推定できる。また、メレアガンが「五十七日間以内」で建てさせた塔にランスロを幽閉することから、この幽閉は八月頃と想定できる。そして「一年以内」という期限の直前にランスロとメレアガンの最終決闘が行われるため、この決闘は次の年の八月末から九月頃であろう。イヴァンが約九カ月間という長い間、森で過ごし、冒頭から合計三年後の五月末にリュネットと出会って後半の冒険が始まると仮定すれば、二作品の時間の流れは合致する。円環的な時間で構成された『獅子の騎士』の、およそ千行で語られる期間の内部には、『荷車の騎士』の、数十日間で起こった出来事が凝縮されて埋め込まれていると言える。

---

[21] « Les bestes par le bois agueite, / si les ocit, et se manjue / la venison trestote crue. / Et tant conversa el boschage, / com hom forsenez et salvage, / c'une meison a un hermite / trova, molt basse et molt petite ; / et li hermites essartoit. » (*Yvain*, v. 2826-2833, p. 86-87.)

3. 未来へと向かう物語

これまで、主として『獅子の騎士』内での『荷車の騎士』の要素について見てきた。後者が前者に組み込まれているだけでは、この二作品の物語世界の結びつきは一方的で部分的にすぎないかもしれない。しかしながら、『荷車の騎士』の本文中でも、複数の箇所が『獅子の騎士』の内容を暗示しており、二作品は全編を通して同時進行で展開されていることが分かる。

二作品はいずれも、アーサー王が祝宴を開いている最中、突如として出現する出来事（Aventure）により場面の幕が開く。『荷車の騎士』では、語り手は、この祝宴の様子を描写した後に、「食事の後、王は皆のところから動かなかった」（« Aprés mangier ne se remut / li rois d'antre ses conpaignons », *Lancelot*, v. 34-35, p. 2）という、場面を解説する二行を付け加えている。だが、大規模な祝宴の折に王が食事の後ですぐに席を立たず、円卓の騎士たちと話すというのはむしろごく当然のように見える。ではなぜこのような詩行をクレチアンは付け加えたのか。

『荷車の騎士』の昇天祭の祝宴の最中、アーサー王が席を外さなかったという記述は、『獅子の騎士』の冒頭場面を暗示した、クレチアンの皮肉を込めた目配せである。『獅子の騎士』で場面が設定されている時は聖霊降臨祭であり、その祝宴の途中、王は席を外して王妃と共に時間を過ごした後、自室で眠り込む。

> しかしその時、人々は自分たちの間から席を立った王にたいそう驚いた。悲しんだ者も何人かいて、そのことについてたくさん話し合った。というのも以前であれば、かくも豪華な祝宴の折に、眠るためであろうと休息するためであろうと、王が部屋へと入ってしまうのを見たことが決してなかったからである。だがその日には、こうして王は王妃に心奪われたまま、彼女のもとに長い間とどまったので、しまいにはついうとうとして眠り込んでしまった[22]。

『荷車の騎士』の二行は明らかに、『獅子の騎士』の冒頭でのアーサー王の態度を暗示している。『獅子の騎士』で王は眠り込み、王権は失墜し、宮廷社会の秩序は危うさを増す。いわば、この異常事態そのものが、冒険を始めるきっかけとなる、出来事（Aventure）である。その後に続く、家令クーの

---

[22] « Mes cel jor molt se merveillierent / del roi qui einçois se leva, / si ot de tex cui molt greva / et qui molt grant parole an firent, / por ce que onques mes nel virent / a si grant feste an chanbre antrer / por dormir ne por reposer ; / mes cel jor ensi li avint / que la reïne le detint, / si demora tant delez li / qu'il s'oblia et endormi. » (*Yvain*, v. 42-52, p. 2.)

悪口や王妃の仲裁から始まり、イヴァンの従兄弟カログルナンが回想する、過去の冒険の場面までは全て、王としてのアーサーが不在という状況で語られている。そこで宮廷の秩序を回復させるため円卓の騎士たちの冒険（aventures） —— すなわち物語の語り —— が始まる。一方、『荷車の騎士』の冒頭で、アーサー王宮廷の秩序を乱すのは、祝宴の最中に起こった、ゴール国の騎士メレアガンの突然の来訪である。ここでも王は、ゴール国には捕囚となった人々がいるにもかかわらず救出もできず、王妃をも誘拐されてしまう、完全に無力な存在として描かれる。

この二行からも、『獅子の騎士』の該当部分が、おそらく『荷車の騎士』の冒頭よりも先に創作され受容されていたことが分かる。クレチアンは自身の第四作である『荷車の騎士』を創作する間、『獅子の騎士』でのアーサー王の振る舞いを念頭に置いたまま、聴衆へと片目をつぶって見せたのである。当時、クレチアンの作品を繰り返し受容していただろう、シャンパーニュ宮廷の聴衆は、 —— 後世の聴衆や読者も同様 —— 、『荷車の騎士』での二行が、作者クレチアンの前作品の内容への仄めかしであることに気付いただろう。

また、『荷車の騎士』における「未来の墓」のエピソードでは、後に「ランスロ」となる「荷車の騎士」は、イヴァンとゴーヴァンの墓碑銘を見出す。騎士は、馬を進める道中、とある修道院を見つける。修道僧の案内により、円卓の騎士たちの未来の墓がある墓地に到着する。

> そして彼は自ら名前をすぐに読み始め、以下のように書いてあるのを見つけた。「ここにゴーヴァン眠るだろう」「ここにルイ眠るだろう」「ここにイヴァン眠るだろう[23]。」

『荷車の騎士』の主人公は、前作『獅子の騎士』での主要な登場人物の二名の名を見出す。円卓の騎士が入るだろう墓を描いたこの場面は、他ならぬ未来への暗示として機能している。ランスロは選ばれし者として、今後起こり得ることを先取りしているのである。時を忘れ、時に追われていたイヴァンとは異なり、ランスロは過去や現在を超越し、未来に属する世界へと足を踏み入れる。皆の墓の名前を読んだ後、今まで誰にも持ち上げることのできなかった巨大な墓碑の蓋を持ち上げ、修道僧を驚嘆させる。その墓には、蓋を持ち上げる者がそこから戻ることの出来ない国（ゴール国）の囚人を解放す

[23] « Et il meïsmes tot a tire / comança lors les nons a lire / et trova : « Ci girra Gauvains, / ci Looys, et ci Yvains. » » (*Lancelot*, v. 1863-1866, p. 57.)

るという予言が記されていた。ランスロはこの予言の通りに、王妃や他の囚人を解放し、世界の救世主としての役割を果たす。

この二作品の二部作としての構成から、他者救出に向かうイヴァンとランスロの姿を重ね合わせることができる[24]。宮廷風騎士道は、たとえ不倫愛であろうとも、武勇と恋愛の調和を目指していた。イヴァンもランスロも、それぞれが崇める奥方に値するように、自己完成のための冒険に身を投じている。これらの二部作は、合わせ鏡のように、主人公二人が騎士道の理想を追求する姿を映している。『獅子の騎士』後半の冒険の各々の部分における、『荷車の騎士』の筋立てへの暗示の埋め込みにより、イヴァンの救出劇は、王妃の救出のためにゴール国へ向かうランスロの姿も映し出す。さらに、イヴァンやその分身とも言えるライオンの献身は、ランスロの愛ゆえの完全な自己犠牲の投影である。ただし、合計三つの『荷車の騎士』への言及中二回、二作品を直接に結びつけているのは、ゴーヴァンの名である。三者の関係を総合すれば、イヴァンとランスロは、二作品に並行して存在するという特権を有しながらも主人公としての地位を得ることのない、ゴーヴァンとの対照を成している。

ランスロは物語の中で活躍する騎士でありながらも、アーサー王世界の崩壊を間接的に導くという、両面性を持った人物である。『獅子の騎士』と『荷車の騎士』の両作品の冒頭で暗示されたのは、宮廷を統治するアーサーの脆弱さであり、それゆえに露呈したのはアーサー王世界の危うさでもある。将来に起こるアーサー王世界の崩壊の原因の一つは、『荷車の騎士』の主題でもある、円卓の優れた騎士ランスロと王妃との不倫関係であろう。王妃との不倫という隠された罪を背負ったランスロが訪れる、未来の墓場という他界は、自身を含む、アーサー王の臣下の死後の世界である[25]。アーサー王世界を救うのもランスロであるが、未来にはその世界は終末を迎えている。そして破滅をもたらすのも、それを予め見通すのも、ランスロである。現世の数えられる「時」をも超えて、未来の世界へと足を踏み入れるランスロは、自身が持ち上げた墓石の蓋のように、重い役割を担っており、ある意味では他の登場人物とは異なる特権的存在である。アーサー王世界の崩壊を暗示する『荷車の騎士』は、未来へと開かれた作品であると捉えることができる。

---

[24] Chrétien de Troyes, *Le Chevalier au lion*, éd. Corinne Pierreville, Champion, 2016, p. 42.

[25] Id., *Le Chevalier de la Charrette ou Le Roman de Lancelot*, éd. Charles Méla, Librairie Générale Française, 1992, p. 19.

中世のアーサー王物語において、自身が他の作品の筋立てにまで複数回言及している例は、『獅子の騎士』と『荷車の騎士』以外に見出せない。クレチアンは、序文の部分で、庇護者や聴衆に対して自己作品への言及を行っていたが、序文はいわばテクストの外部にあって、物語の内容とは切り離されていた。『獅子の騎士』と『荷車の騎士』の二作品は、虚構として書かれた物語の内部の時間が互いに結びついている。クレチアンは、自身の作品で、他の作品の登場人物へ複数回言及するという、ジャン・フラピエがバルザックの「人物再登場」にもなぞらえた技法を多用していた[26]。例えば、最初の作品『エレックとエニッド』の主人公の婚礼の儀式の場面では、出席していた円卓の騎士の名前が列挙されており、後の作品の主人公であるイヴァンもその名前が登場する[27]。ペルスヴァルも、第二作目とされる『クリジェス』の後半のエピソード、オックスフォードでの馬上槍試合の場面において、既に名高い騎士として登場する[28]。クレチアンは、自己作品への言及を、登場人物の次元から作品の次元にまで発展させたのではないのだろうか。『エレックとエニッド』と『クリジェス』における例では、言及された登場人物が実際に何らかの行為を行うわけではない。あくまで円卓の騎士の成員のひとりとして、名前が引用されるだけであった。ところがこれまで見てきた、『獅子の騎士』の引用箇所では、ゴーヴァンやランスロは、『荷車の騎士』での冒険にかかわっている最中である。このようにして、クレチアンは二作品の筋を錯綜させていると言えるだろう。『獅子の騎士』で始まった物語は、途中で『荷車の騎士』での冒険を語りつつ、同時に進行して行く。二つの物語の時間は合流し、最終的にアーサー王世界の未来を先取りして暗示するのは『荷車の騎士』である。

結論にかえて

『獅子の騎士』と『荷車の騎士』における時間標識は、単なる状況補語ではなく、重要な役割を果たしている。二作品の筋の錯綜は、イヴァンとランスロの共通点と相違点を浮き彫りにする。「時間」を忘れたイヴァンと、「名前」を忘れたランスロは、両者ともに意中の奥方に値するように冒険に挑み、

---

[26] Jean Frappier, *Chrétien de Troyes : l'homme et l'œuvre*, Hatier, 1957, p. 221.

[27] Chrétien de Troyes, *Erec et Enide*, éd. Mario Roques, Champion, 1952 (réimpression 1990), v. 1671-1706 , p. 51-52.

[28] Id., *Cligès*, éd. Alexandre Micha, Champion, 1957 (réimpression 1982), v. 4774, p. 145.

同時にアーサー王宮廷世界の人々を救う。そして、クレチアンは当初から、それぞれの世界に円環的時間と直線的時間という異なる時間性を用い、皮肉を込めた目配せをしつつ、巧みに作品間を行き来して見せたのである。迫り来る時間と戦うイヴァンとは別に、ランスロは世界の救世主として、自ら未来を切り開く。『獅子の騎士』の進行に伴い、『荷車の騎士』の内容も進行し、両作品は二部作として相互に時間の流れでもって結びついている。このような二つの作品の構成が同時進行性を示している例は、中世作品全体の中でも、極めて稀有な例と言えるだろう。